サッカーにおける各種課題ゲームの体力・運動能力つくりからみた負荷特性
○津田隆佑（筑波大学大学院） 後藤邦夫、高松 薫（筑波大学）

本研究では、サッカーの教材として一般に用いられている課題ゲームに焦点をあて、プレーの仕方の相違が体力・運動能力つくりからみた負荷特性に及ぼす影響、およびゲーム中のボール接触回数に影響を及ぼす要因について検討することを目的とした。そのために、中学校男子生徒12名を対象に、課題ゲームとして4対4のフリーゲーム、パスゲーム、マンツーマンゲームの3ゲームを行わせた。また、スキルテストとしてバストテストおよびドリブルテスト、体力テストとして50m走、250m（25m×10、30秒休息）方向変換走および20mシャトルランを測定した。その結果、(1)課題ゲームのプレーの仕方を変えることにより、体力・運動能力つくりからみた負荷特性は大きく異なること、(2)パスゲームは、基礎的な技術が劣る子ども達に対してゲームへの参加機会を多くできる可能性があること、などの知見を得た。

小学校の運動部活動における教育的意義に関する研究
○前谷智仁（香川大学大学院） 山口貞一（香川大学）

本研究では、小学校の運動部活動に焦点をあてて、部活動に関わる児童、保護者、及び指導教員の意識や実態を調査し、様々な観点からその教育的意義について追究した。運動部活動では、自分や他者のからだに気づいたり、からだを楽しんだり、気遣うことをねらいとし、その主たる活動内容としては、小学校期に身につけるべき基礎的な身体操作能力を高めるものとした。そして、一人一人の個性や能力に合わせた活動や評価等を工夫することによって、年齢差や性差、また技能差を超えた児童の健全な発育発達を支援する教育的意義のある運動部活動のあり方を検討した。その結果、「基本的生活習慣の改善」や「夢中になれる心とからだづくりの創造」に寄与する教育的意義の一端が示唆された。

運動部員数の経年変化
一埼玉県高体連加盟団体報告書から見た最近15年間の動向一
○古川 修（大宮武蔵野高校）

本研究は高等学校における運動部活動のあり方を考える立場から、1989年（平成元年）から2004年（平成16年）までの「埼玉県高等学校体育連盟加盟団体報告書」を主資料として、ここ15年間の部員数の動向を見ようとするものである。埼玉県の高校生徒数は1989年をピークにして急減期に入り、15年間で約9万人も減少した。運動部員数は約21,000人の減少で、運動部加入率は逆にアップしている。しかしながら、その実態は各高等学校により差が見られることも事実である。

そこで本発表では公立高校の約7割を占める普通科の男女共学の中に見られた部活動の状況を例として取り上げ、過去15年間の推移を検討する。○高校は2004年10月1日発表の県内中学校卒業予定者の高校別進学希望状況で最も進学率の高い高校で、毎年200名以上の現役での大学短大進学者を出している進学校である。